

|         |                         |            |  |
|---------|-------------------------|------------|--|
| 氏名(本籍)  | やま がた かず み<br>山形和美(東京都) |            |  |
| 学位の種類   | 博士(文学)                  |            |  |
| 学位記番号   | 博乙第959号                 |            |  |
| 学位授与年月日 | 平成6年3月25日               |            |  |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当            |            |  |
| 審査研究科   | 文芸・言語研究科                |            |  |
| 学位論文題目  | グレアム・グリーンの文学世界——異国からの旅人 |            |  |
| 主査      | 筑波大学教授                  | 川口 喬一      |  |
| 副査      | 筑波大学教授                  | 赤祖父 哲二     |  |
| 副査      | 筑波大学教授                  | 荒木 正純      |  |
| 副査      | 筑波大学教授                  | 文学博士 中山 恒夫 |  |
| 副査      | 筑波大学教授                  | 森田 孟       |  |

## 論 文 の 要 旨

本論文は、活版印刷 A5 版総ページ数472（序にかえて6ページ、本文395ページ、注25ページ、あとがき5ページ、主要文献22ページ、索引20ページ）からなる学術論文である。

本論文は、イギリスの代表的な現代作家であるグレアム・グリーン（1904-91）の60年にわたる作家活動とそこから生み出された作品世界を、主としてモチーフの展開と作品構造という二つの観点から、総体的・統一的に捉えなおすことを目的としている。

序にかえて

第一章 グリーン・ランドへの旅

第二章 グリーン文学の核心——文学と宗教と政治と

第三章 オブセッションの形象

第四章 墮地獄のミステリオン

第五章 信仰への接近と離脱のベクトル

第六章 政治的情況と喜劇的幻視

あとがき

主要文献

グリーンはまず〈政治の季節〉と言われる1930年代に、多くの青年たちとは袂をわかちながら独自の作家的生涯を築いていった。つまり20世紀人間の意識と不安を描くために、伝統的な形式の中に豊饒な物語性と独特の透徹した幻視とを盛り込んだ。論者によれば、こうした幻視はグリーンの文体

を限りなく詩に近づけ、同時に作品空間に亀裂を生じせしめるエネルギーでもある。この認識が論者にとってのグリーン文学の基本的な形である。

グリーンの文学的閱歴を整理すれば、幼くしてグリーンは、いわゆる〈緑のラシャ張りの扉〉によって自我の分裂を体験し、このことの呪縛から作品創造への道を拓くことになった。まず自己の内面に異常に沈潜する人間を主人公にした、ロマンティックな作品によって出発し、そのあと外部世界と内面の融合を目指す作品を書き、それを経ていよいよカトリシズムを中心に据えた大作を矢継ぎ早に世に問うことになる。しかし次に、世界政治を取り込む作品を書くようになり、このころから喜劇的幻視が作品の表層に現れはじめる。ここで初めて、カトリシズム、世界政治、喜劇的幻視という三つの要素が組み紐のように絡み合い、それが前景化と後退を繰り返しながらグリーン文学の終局に向かう。このような前提のもとに、論者はリアリズムの現実対ロマンス的幻視、豊饒な物語性対詩的比喩表現などの対立を視野におさめつつ、前六章の章立ての中で個々の作品の綿密な分析を行なう。

第一章「グリーンランドへの旅」では、グリーン的人格や文学の形成のプロセスを時間を遡る形で跡づける。死後に寄せられた追悼記事を出発点として、グリーン文学の歴史的な文脈を作家の幼児期体験、文学創造への衝動、さらにカトリック作家としての運命を改めて検証する。

第二章「グリーン文学の核心——文学と宗教と政治」では、グリーン文学の全作品を視野に入れて、この作家の担ってきた根源的な諸問題、すなわち文学と宗教、特に悪、墮地獄、信仰、神などをめぐる問題をいかなる形で作品化するか、そのとき作家はどのようなアポリア（一種の判断停止）に突き当たるかなど、論者はグリーン文学の核心にある重要な局面のほとんどすべてを摘出して、それらを独自の統一的ヴィジョンのもとに収斂させようとする。

以上の二章は、このあとに展開される個別の作品論のためのいわば総論にあたる。以下の各章ではグリーン作家活動をほぼ歴史的に辿りながら、作品の展開と変貌の姿がいくつかの具体的な項目のもとに論じられる。

第三章「オブセッションの形象」では、グリーン処女作である詩集『おしゃべりする四月』から小説『イギリスがわたしを作った』までを幼・少年期体験を基軸とする〈オブセッションの形象〉の相のもとに捉える。この詩集から『夕暮れの噂』までを論者はいわば習作の時期、すなわち『イスタンブール特急』誕生のための習作期として理解し、30年代の一見政治的な『ここは戦場だ』をも〈政治小説〉として読むべきではないことを強調する。最後に『イギリスがわたしを作った』では、作家グリーンが祖国を喪失した人間がその祖国が強いるオブセッションから永遠に開放されない複雑な状況を設定したことの中に、作家のオブセッションへの執着の極限があったことを検証する。

第四章「墮地獄のミステリオン」では『ブライトン・ロック』から『事件の核心』に至る作品群、つまりグリーン文学のピークを形成するいわゆるカトリック小説サイクルが、モチーフと語りの構造の両面から詳細に分析される。『ブライトン・ロック』論では、〈善〉への徹底的な意識が〈悪〉への徹底的沈潜を可能にする状況を、『力と栄光』論では、いわゆる〈時効論〉が今世紀のたぐい希な傑作を産むことになった、その作品の構造が分析され、そして『事件の核心』論では、恐るべき破壊力を秘めた〈共感〉とその対極にある〈憐憫〉とがいかに作品構造を決定し、そしてそれがいかに作者

の小説技法によって支えられているかが分析の対象となる。すなわちここでは論者の最大の感心は、キリスト教と文学の微妙な関係にある。

第五章「信仰への接近と離脱のヴェクトル」では、前章のモチーフとは逆の、〈信仰への接近と離脱〉という方向性、すなわち〈移行あるいは推移のプロセス〉を独立したモチーフとして措定して、『情事の終わり』から『燃え尽きた人間』に至るまでの作品が論じられる。『情事の終わり』論では、信じざる神への祈りが聞き届けられて、その神に呪縛されて死んでいった人妻の苦悩や彼女の恋人の反応の分析が、論者の慎重な論証手続きによって行われる。ここでは技法の分析がそのまま作品の総体的評価ともなっている。このことは『燃え尽きた人間』についても同様で、ここではテーマとしての〈信仰の逆説〉、もっと具体的には〈信仰・不信仰・さらに無信仰〉などの絡み合いが、作者の複雑な変容を反映しつつ作品化されているありさまが分析の対象となる。

第六章「政治的状况と喜劇的幻視」では、これまでいたるところでその萌芽が見られた〈政治的状况〉が、はじめて『静かなアメリカ人』において明確に作品化されたこと、それがカトリシズムと微妙に絡まり、さらに喜劇的幻視とも重なり、グリーン文学の方向性がいよいよ鮮明になることが綿密に論じられる。このような後期のグリーン文学が行き着いた姿は、『静かなアメリカ人』から始まって『喜劇役者たち』、『名誉領事』を通して最終作『キホーテ神父』に至る作品群に典型的に見られる。その意味では、カトリシズムと政治的状况というそれぞれに重い世界が喜劇的幻視によって支配されている『キホーテ神父』は、論者によれば、グリーン文学の、そしてまたグリーン文学総体の、いわば墓碑銘でもあるということになる。

## 審 査 の 要 旨

以上に概括したように、本論文はグリーンの世界を構成する個々の項目や個々の作品をそれぞれ時代順に分析の対象にしなが、同時にその総体が描き出す顕著な軌跡を探り当てようとするものである。幼年期、少年期のオブセッションによって引き起こされ、やがては喜劇的幻視によって絡め取られることになるはずの宗教と政治という要因を、論者はグリーン文学の中核としてみごとに整理して見せ、さらに、最後にオブセッションが強いるところのこれらの要因がグリーンの世界をパターン化していることを明確な視点から論証する。すなわち、オブセッションが現実にはテキスト化するときのパターン化のプロセスを辿り、それによって実現された作品の様態を読み解くことが論者の最大の批評行為なのである。文学作品として具体化されたテキストをあたかも実人生のドラマとしてまず読み、分析の対象にするが、そのドラマはあくまでも言葉によって定着された言語構築物であるので、論者はなによりもみずからテキストに語らせることを心掛け、実作者の生の声、生の顔よりも、創造者としてのグリーンのパルソナを結果として前景化することを目的としている。

さらに本論文では、個々の作品はそれぞれ固有の意味を内在させているという前提からそれぞれの作品の分析を行うと同時に、先行するさまざまな内外の文献、同時代人の批評に見られる読みの実践を積極的にみずからの読みの中に組み込むことによって、作品批評の独自の文脈化を行なっている。

それは、一つの文学作品は一人の作家の創造したテキストとして存在すると同時に、作品とはテキストとそれをめぐる批評とのいわば総体であるという論者の文学理解からくるものでもある。

本論文はグリーンの文学を総体として捉えようとしたわが国における最初の本格的な論考であって、今後のグリーン研究に寄与するところ多大であると判断する。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。